

〔共済連だより〕

フレッシュ獣医師

生産獣医療支援センター 石井 さやか

私は昨年4月にあこがれの大動物臨床獣医師になりました。桜が咲き、去年の春初めて食べたタラの芽も食べられる季節となり、あれから1年経ちましたが、まだ一ヶ月も経っていないような気がします。こんなに速い一年は初めてでした。

去年の春、生産獣医療支援センターに配属が決まった頃は、社会人になる緊張はあったものの、家畜の診療に関しては分からないことばかりで、何が分からないのかも分からず、むしろ気楽な気分でした。

大学時代はDNAやRNAと付き合い、しかも非農家で育った私が、夏に始めて一人で診療に出て直面したのは、牛が捕まらない！という問題でした。

何処へ逃げるか予想がつかない、足は牛床にはまって抜けられない(牛はなんではまらないのでしょうか?)。目的の牛は遠いし、捕まえたと思ったらモクシ(オモガタ)が抜けたり、せっかく捕まえてもロープが解けて逃げられてしまい……。

その姿を野次馬ならぬ野次牛が群がって見ている。牛と綱引きしても勝てる気もせず、ようやく捕まえて保定するまでがまず大難関でした。

ロープの結び方やモクシの作り方、捕まえ方などを診療所の先輩や農家さんに沢山教わりました。毎日とても役にたっています。

ありがとうございました！未だに逃げられています、一年前よりは確実に巧くなったと思います。

最初は無表情にしか見えなかった牛も、ああ、今面白がっているとか、怒っているとか、少しずつ表情が見えるようになったのだと思います。段々親しみが湧いて、牛に向かって一人喋りだしました。「頼むわー。後一本だけ、すぐ済むけ」とか、鼻息荒い母牛に「お母ちゃんおこらないで！あっち向いてて」とか、横で悪さをする野次

牛に「注射するぞ。」とか。あまり通じていないようですが多少なりとも牛に慣れることができたのなら嬉しいです。

この一年間、診療のことで毎日頭が一杯でした。特に一人で往診し始めた頃は、本当に心細く、不安でした。牛を診るのが怖く、混乱し、とても引け腰になっていました。それを解消したく、診療所に帰ってからひたすら勉強しました。しかし教科書に書かれている内容が現場の牛に結びつかず、教科書からは教われないことが沢山あるのがよく分かりました。

無闇に不安になっても仕方がないと開き直ったところで半年が終わり、少し落ち着いて牛に触れ、考えることが出来るようになりました。

半年が過ぎた11月の夜間当番の夜、電話が鳴った時は本当に椅子から飛び上がりました。初めての休日当番の時も同じく、朝一番に入った診療の電話に対応したのですが、私のしゃべり方が余程生気がなかったようで、電話の向こうで「テンション低ーいっ！気合入れて！」と活を入れていただきました。

毎回毎回新しい事に出会うたびに不安で一杯でしたが、多くの人に背中を押して頂き2年目の4月が来ました。

同じ獣医師の先輩や農家さんに励ましを頂くことはしばしばですが、特に自分とさほど年の変わらない方が頑張っている姿をみると自分も頑張らねばといつも思います。今の自分はまだまだ未熟ですが、これからもいろいろ経験して、早く信頼される獣医師にならなければと思っています。